

## 結論

本論文は、『意地』三部作における武士像を究明したものである。そして、主に主人公と主君の支配関係に隠された武士の感情を明らかにすることを旨とした。それで、第一章から第三章にかけて、各作品における主人公と主君の人物像を中心に考察する。まず、各章で君臣関係における支配関係の考察を経て得た結論について述べる。

第一章では、「興津彌五右衛門の遺書」における主人公興津彌五右衛門と主君三齋公は、武士としての本分と物事に対して共通な価値観を持っているから、互いに満足できる関係を築いた。そして、興津彌五右衛門と主君三齋公は、各々の本分を尽くし、互いの立場を配慮し、強力な信頼関係が成立し、調和な君臣関係が成り立ったのである。

第二章では、「阿部一族」の前半部における主人公彌一右衛門と主君忠利の君臣関係には、忠利の先入観により、主君に忠誠心がなくても主命を果たせる臣下と臣下のことを信頼する主君だけが見られる。そして、忠利は彌一右衛門に殉死許可を与えない理由は、彌一右衛門が光尚に仕えても、「意地ばかりで奉公して行く」(P.327)という態度が変わるわけがないのである。しかし、彌一右衛門の追腹した理由は、彌一右衛門は高慢な处世態度で家中に煙たがられ、主君に殉死許可を与えられなかったことを契機として、意地悪く非難されたのである。武士としての完璧さを追求する彌一右衛門は自分が命を惜しむ男ではないことを証明するために、追腹したのである。このように、主君細川忠利と臣下彌一右衛門は、二人の性格や处世態度が違うので、それぞれ主張をもって付き合うことにした。しかし、彌一右衛門は、主命を優先的に配慮する臣下であり、忠利は先入観があっても、明理的に物事を配慮する主君なので、性格が合わなくても、各々の立場を守り、適切な行動を取るのである。それで、主君細川忠利と臣下彌一右衛門は共に意地を張っている武士だといえる。このような偏執な君臣関係は、個人の考えや態度を守るの上で築いたものである。要するに、彌一右衛門は自我の世界を生きている武士だと見られ、忠利は先入観より臣下の忠誠心を判断する主君である。そして、忠利が臣下の殉死に関することを考える時に、臣下に許可を与えるかどうか、政権交代と新勢力圏の君臣関係をも配慮したのである。従って、忠利は個人の感情に影響される主君であっても、物事を全般的に配慮するという性格を持った主君だといえる。

そして、「阿部一族」の後半部では、阿部家の遺族と光尚の主君関係を中心に描かれている。阿部家の遺族は彌一右衛門が追腹をした後、光尚の不公平な処分が原因で、主家に反逆し、討手を受けて滅亡させられたのである。この不公平な処分とは、最初に光尚は彌一右衛門と権兵衛との親しみがなく、自分の手元に使ってきた彌一右衛門の三男である市大夫に知行を増したいという理由で、林外計の献策を受け入れたのである。だが、阿部家の家督としての権兵衛は主君の光尚の処分に納得できず、先代主君忠利の一周忌の場面で、光尚に不服を表明したのである。面子を潰された光尚はこの反逆行為を許せず、縛首という処刑を施したのである。阿部家の遺族は、光尚の激しい処置方法に反逆を起こし、全族引き籠もって、討手を待つことを決意したのである。このような悪循環によって、阿部家が滅亡させられたのである。権兵衛と父彌一右衛門の行為から見れば、二人は共に主君に忠誠心を持たず、個人の主張を中心にする武士だと言える。ほかの阿部家の遺族は、阿部家の面子を潰されたことを意識し、反逆することを通して、面目を取り戻したいのである。主君光尚も阿部家の遺族と同じく、主君としての面目を取り戻したいために、討手を決意したのである。要するに、このような対峙な君臣関係は、互いの未熟な处世態度の上で築いたものである。阿部権兵衛と阿部家の遺族と主君光尚は、武士社会の規則に対する共通な意識を持たず、互いに責め、各々の面目を守るために行動を取る武士像が見られる。

二組の君臣関係には、忠利は先入観に従い、臣下を支配する主君である。光尚は先に臣下の所為に影響され、臣下を支配する主君である。彌一右衛門は主命を果たせることが優先的に考えるが、主君や家中の付き合いや人間関係を築くことに対しては消極的な対応をし、また家族を守ることができず、消極な態度で遺言を残しただけである。つまり、個人の主張で生きている武士だと見られる。権兵衛は父彌一右衛門と同じく個人の主張で生きている武士だと見られるが、物事に対する対応が違うのである。権兵衛は一旦不平等な待遇を受けたら、相手は主君であっても、その立場を配慮せず激しい手段で不満を表明する武士である。

第三章では、「佐橋甚五郎」には、最初に、主君徳川家康は主人公佐橋甚五郎を助命し、甚五郎は主命を果たしたという互いに配慮する君臣関係が築かれた。しかし家康の猜忌心により、本来の互いに配慮する君臣関係が崩れ、甚五郎との君臣関係が互いに警戒する関係となる。それで、甚五郎が復讐の念をもって逃亡し、朝鮮の使者となり、無言のままに、家康の目の前で出現したのである。このように、家康と甚五郎は武士の

行為に対する共通の意識を持たず、信頼関係も築いていないうちに、表裏あるの君臣関係が成り立ってしまったのである。このように、家康は戦国時代においても、主命を果たすことより、臣下の忠誠心を大切にす主君だと見られる。甚五郎は武士としての道德意識を持っているけれども、場合によって変ってしまうのである。つまり、甚五郎は個人の主張があり、意地が強い武士だといえる。

以上、第一章から第三章までの論説を簡約に述べてきた。それを踏まえた上で、『意地』三部作における武士像を明らかにした。『意地』三部作における君臣関係の共通点としては、臣下としての主人公の側では、恩を報いることが見られる。それに対して、主君の側では、臣下の忠誠心を優先的に考える主君像が見られる。しかも、臣下の忠誠心、服従することは、主君の対応によって変わるものである。主君が臣下に対する対応は、互いの折り合い関係によって変わるものである。従って、このような君臣関係はほぼ人間関係と同じ、個人の感情や行為に影響され相手と付き合うという事になるのである。そして、一般的の人間と違った点は、ただ武士という身分は厳しい権力階層があるので、絶対権力をもっている主君が臣下を支配できるのである。換言すれば、『意地』三部作における武士像は、武士としての倫理道德が見られるが、君臣関係における武士像は人間と人間の互いの対応関係で築いたものである。

要するに、『意地』三部作に描いた武士像には、武士としての道德観が見られるが、個人の生命や面目を守るために、心に潜んでいる個人の主張で主君と戦う武士の姿も見られる。そして、『意地』三部作における武士像は武士の心に潜んでいる好悪、私欲、猜忌などの感情に引き起こし、それぞれの武士像が形成されるのである。

今回、君臣関係における支配関係という視点から、『意地』三部作に描いた武士像を究明してきた。そして、君臣関係における武士像を考察しているうちに、臣下と臣下の横の繋がりがあることに気づいた。たとえば、阿部彌一右衛門や阿部家の遺族と家中との同僚関係である。この横の関係が面白く感じたので、深く考察する価値があると思われる。それで、これを今後の課題として、『意地』三部作における武士と武士の横の繋がりを中心に探究していきたいと思う。